

痔漏口訣

304
90



始



痔漏口訣

304
90

0
1

所謂痔漏に就て



痔の名は始めて素靈に見える。即ち素問の生氣通天論には「因つて飽食すれば筋脈横解し、腸澀、痔と爲る」とあり。又骨空論には瘰癧。至真要大論には瘰癧。又痔漏などの名が見えるが、靈樞には邪氣藏府病形篇に「腎脈微澹、不月沈痔と爲る」とあり。尚經脈篇には痔瘻。熱病篇には寒熱痔等の目がある。併し世に所謂五痔の見えるのは、隋の巢元方の病源候論であつて、牡痔、牝痔、痔、血痔の各種を挙げて居り、唐の孫思邈の千金方には、一に曰く牡痔、二に曰く牝痔云々として、最も明瞭に之を五痔と称して居る。更に七痔の名は、明の皇甫中^{明の皇甫中}の明醫指掌図に出て居るが、二十四種の痔は、明の龔信の古今醫鑑に記載されて居る。七痔と云ひ二十四痔と称し、勿論其證狀に依る區分ではあるが、例へば痔瘻や痔瘡等にも之を見るが如く、分類濫稱眞に其弊に堪へぬものがあると思はれる。本書の五々二十五痔の如き亦然りであるが、必ずしも細別分類を必要とせないことは、治法の總括的なるに見ても之を知り得るのである。

所謂「痔」の意義に就ては、宋の陳無擇の三因方に「大澤中に小山の突出ある



が如きを疇と爲す。人の九竅中に於て、凡そ小肉の突出する者有るを皆疇と曰ふ。特に肛門の辺に於て生ずるのみならず、亦鼻疇、眼疇、牙疇等有り。之に有るに依つて、之を知り得るのであるが、疇漏の名は千金方に見えるのが最初であり、其れは外臺秘要以下の諸書に見える。疇瘻に外ならぬのである。本草綱目には、美賣備急方を引いて、之を疇痛に作つておるが、正字通其他に據れば、瘻は即ち漏の義であり、又之を漏にも作るが、漏は屋穿つて水するなり。所謂、結核より膿潰に至るのを、總て瘻と云ふのだとある。亦通じて、瘻にも作るこのことである。

本書の著者は、平安の山本總、字は君清であるが、其傳記が不明なのは如何にも遺憾の至りである。併し寛政享和時代に於ける後世家であり且相當の實驗家であつたことは、其記述に依つて容易に之を知ることが出来る。反言すれば、如何にも片々たる小冊子にはあるが、能く痔疾療法の要旨を述べ盡して居るものと思ふ。是れ敢て其覆刻を企て、以て世の篤志家の参考に資する所以である。

皇紀二五九七年 昭和十二年十二月

覆刻者 識

痔漏口訣序

古人有言曰自衒自媒者士女之醜行也。然有似自衒自媒而審視之、不醜行者。有如不醜行而熟察之却自衒自媒者。其蹟在鈞其實霄壤也。頃者都下稱名醫者不尠。欲各闢門戶、建一家言、雖其論如可喜、然視察之不自衒自媒者殆希也。要之未能脱僥倖名利、馳競世路之情歟。山本氏著痔漏口訣、直論淵源、而法方亦隨焉。若夫親試事實、自得功效者、而有此舉、則惻怛之道、慙心之餘、誰敢謂自衒自媒者乎。梓成請予序之、予謝不敏、不許、遂以書卷首。

享和辛酉夏四月

富 鴻



痔漏口訣 目次

(一) 二十五痔	一	(一〇) 又方生肌散	七
(二) 枯藥を製する法	三	(二) 辰砂錠子	七
(三) 護肉の藥	四	(三) 盤腸通腸痔散	八
(四) 痔漏千金の秘方	四	(三) 痔腫者	八
(五) 又秘方	四	(四) 諸痔を治す	八
(六) 生肌長肉の藥	五	(五) 痔漏を治す	八
(七) 點痔の藥	六	(六) 漏孔合はぶるを治す	八
(八) 痔漏藥	六	(七) 益氣清臟湯	九
(九) 生肌散	七	(八) 秦朮蒼朮湯	九

(元) 秦艽防風湯	一〇	(元) 槐角丸	一三
(二) 秦艽羌活湯	一〇	(二) 腸風痔漏下血臟毒治方	一三
(三) 秦艽當歸湯	一〇	(三) 大腸内結燥疼痛治方	一三
(三) 當歸郁李仁湯	一一	(三) 已に破れ未だ破れざる痔漏治方	一四
(三) 紅花桃仁湯	一一	(三) 痔を療する神方	一四
(三) 槐角子湯	一一	(三) 氣を壯にし腸を收むる方	一五
(五) 木香散	一二	(五) 猪肚膏	一五
(三) 又方	一二	(三) 海螺蚶	一五
(三) 蒼朮澤瀉丸	一二	(三) 甘草膏	一五
(三) 秦艽白朮丸	一二	(三) 孫真人麝香膏	一六

(元) 丹溪先生漏瘡治方	一六	(四) 摻藥	一八
(四) 薰痔方	一六	(五) 大人小兒摻藥	一八
(四) 洗痔方	一七	(四) 升元大補湯	一九
(四) 洗痔國老湯	一七	(四) 虛人の脱肛灸法	一九
(三) 脱肛痔	一八	(四) 洗法	二〇

痔漏口訣目次終

痔漏口訣

平安 山本纓君清述



二十五痔

凡痔に五名あり、牡痔、牝痔、腸痔、脈痔、血痔等なり。素問に曰く、
因つて飽食し、筋脈横解、腸澀痔と爲るとて、發する所多くは飲食
節ならず恣に肥膩、辛辣、炙煨、醞酒、禽獸異物を食ひ、醉飽時無く、色
に耽り、或は嚴寒酷暑を避けず、或は久しく濕地に坐し、或は久し
く大便を忍び、遂に陰陽和せず、關格壅塞して風熱下衝するとき
は、乃ち五痔となる。五痔變じて五五二十五種となる。或は左

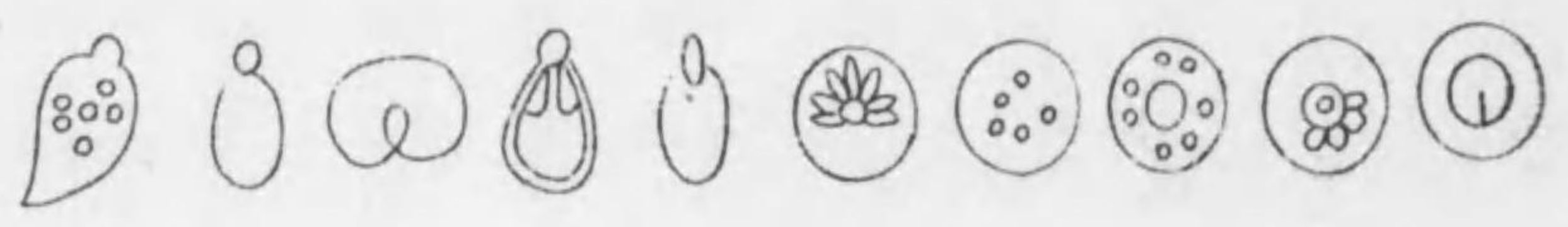
或は右或は内或は外或は狀鼠孀の如く或は形櫻桃の如く或は膿血を出し或は痛み或は痒きこと忍び難く或は腫久しく治せされば遂に漏となる。大法涼血を以て主として徐々に效を見るべし。妄りに砒霜等の毒薬を用ふべからず又輕マしく割取るべからず終に漏瘡となる。又肛門の左右に別に一竅ありて膿血を出すもの名けて單漏と云ふ。是を治するには温煖の劑を以て其内を補ひ生肌の薬を以て其外に敷くべし。其竅皮膚に在るものは愈え易く臟腑に損有つて竅を致すものは治し易からず。今二十五種の圖を著すこと左の如し。

蓮子痔



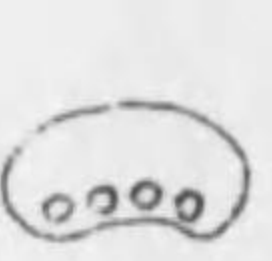
狀蓮子の如し

- 通腸痔
- 氣痔
- 漏痔
- 勾腸痔
- 蓮花痔
- 鷄心痔
- 垂珠痔
- 貫煉痔
- 栗子痔
- 菱角痔



其根は臟より生ず。糞出づる時は即ち下る
 氣に感ずれば即ち下る
 氣血衰へ敗れスうして成る
 其形腸頭を遠るものなり
 形蓮花の如し
 其形鷄心の如し
 其形垂れ下りて珠の如し
 穿ちて膿血を貫く
 其形栗子の如し
 形菱角の如し

盤腸痔



形盤腸して生ず、内に在るものなり

子母痔



一は大、一は小なり

繸花痔



形花の繸るが如く、厠に登れば即ち出づ

鼠爛痔



形鼠の爛の如し

雙頭痔



両頭あり

泊腸痔



肛門に緊泊するものなり

血攻痔



血出づるなり

夫妻痔



一は圓、一は長、即ち雌雄なり

珊瑚痔



形珊瑚の如し

脱肛痔



肛門脱下す

擔腸痔



其痔横に肛門に在り

三迷痔



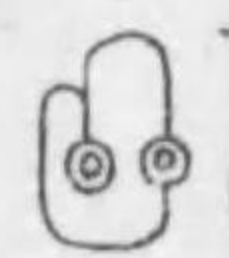
有_レ三、財に迷ひ色に迷ひ酒に迷ふ故に名づく

櫻桃痔



形櫻桃の如し

雌雄痔



酒色食毒なり、黒色になる

右諸痔の名類同じからずと雖も、其種は一なり。皆大腸傳道風熱深くして腎氣虚し、冷氣相攻め、或は猪、雞、魚、膾、醸酒、辛辣等を飽食し、或は厠に登り、臟虚し、風邪の爲に襲はれ、或は六氣七情に感じて發す。又生_ふ素_を飲酒せざる人の痔を患ふるは臟虚する故なり。亦母血父精、父子相傳へて腸風となるは、血痔の漸なり。速に涼血補劑を服して、勞を少なくし、怒を戒め、色を遠ざけ、口を忌むときは能く愈ゆ。

(二) 枯藥を製する法

痔を枯らし乾かす貼藥なり。

信石(十匁) 白礬末(三十匁) 飛丹(五匁)

硃砂(五匁)(臨時生用) 巴豆(五粒)(去殼)

右先づ白礬十五匁を以て、瓦盆の中に置き、信石を白礬の上へ摻すりけ、又白礬十五匁を以て信石の上を覆ひ、火にて熬枯し、取出して末となし、硃砂の末五匁を加へて、和と勻のへ、碾すりて極細末となし、先づ魚腥草煎湯を用ひて痔を洗ひ淨め、毎用少許上に點ず。少頃あつて黄水漸々に出づ、一日一夜に三四度點ずべし。若し魚腥草無くんば、或は茶蘼花、或は野薔薇花、紅白槿花を以て之に代ふ。又

甘草湯も可なり。

[註] 信石は、砒霜石。飛丹は飛過黃丹の略。水飛せる鉛丹を云ふ。魚腥草は、截藥、即ちト

クダミ。茶蘼花は薔薇科のトキセイバラ、一名ホタンバナ。

(三) 護肉の藥

好肉を護る貼藥なり。

鬱金(五匁) 黃連(五匁) 白芨(三匁)

右三味末となし、蜜にて稀調うすくじへ、先づ此藥を以て、痔の四邊好肉の上うへに塗り、薄紙を用ひて上に點じ、好肉を固濟して後、痔の藥を點ずべし。

[註] 固濟は塗りこめること

(四) 痔漏千金の秘方

牡蠣二十匁、煨過、地空坑に入れて埋め、火氣を去りて細末とし、痔漏に搽くべし。若し痔漏乾かば、津を以て痔に搽るべし。

(五) 又秘方

砒霜（白色明淨のもの）（五匁） 白礬（明淨のもの）（十二匁）

黃丹（水飛すること二次、焙り乾かし）（六匁） 草烏頭（皮を去り）（二匁）

蝎梢（瓦上にて焙乾し）（八箇）

右件の藥を、舊き鐵の杓か、或は鐵の銚子の類を、炭火にかけて焼き、紅になして後冷し、白礬を入れて焼く、滾沸して、砒石を打碎き、豆の大きにして白礬の内へ投じ、拌勻し、文武火にて煨き、旋々に

草烏頭、蝎梢、黃丹を入れて攪ぜ、同じく研り末とし、小瓶に入れて貯へ置くべし。

用法 痔漏を甘草湯、或は葱湯にて洗ひ、右件の藥を生麻油にて少許調へ、鳥の翎を以て、痔を掃ふこと三度すれば、一二日目より、瘡内より黄水を出すこと膠の如く、其痔漸に消す。次に漏の深淺を見るには、薄綿に猪鬃三根をつゝみ、漏内の深淺を試みて、後紙摺に藥を點じて漏内へ挿入し、藥紙摺を換ふること蚤午晚三次なり。其たびごとに漏を洗ふべし。用藥三五日、痔漏の頭併瘡口黒色になる。然して後紙摺の藥を用ひず、其漏瘡自ら落つ。若し漏深く入らざれば、藥を用ふること前説の如くすべし。若



し瘡紅活平復すれども、口を収めずんば、生肌散を用ひて敷くべし、立所に愈えて、其瘡根永く再發せず。

[註] 蝸稍はサソリの足

文武火は、よき加減の火——旋々はソロ／＼の意

猪駝は、猪のタテガミ

蚤午晚は、朝晝晚

生肌散については、次項参照

(六) 生肌長肉の藥

- 血竭(五匁) 龍骨(五匁) 光粉(二十匁) 白芷(五匁)
- 黃丹(水飛)(三匁) 軟石膏(一匁) 黃連(五匁)

- 海蝶蛸(一匁) 黃柏(十匁) 五倍子(十匁)

右細末として、瘡孔深きには蘆管にて裏面へ吹き入る。若し瘡の口淺くば、^{かりか}掺くべし。肌肉を生じ平復す。

[註] 光粉はゴフン

(七) 點痔の藥

- 冰片 乳香 沒藥 龍膽

右俱に末となし、生蝸牛一枚、其底を碎き、右四味の末を入れて、蓋内に放ち置けば水となる。銀の簪を以て、其汁を痔の上に滴す。甚だ效あり。生蝸牛無き時は、田螺を以て代用して可なり。

[註] 冰片は龍腦

(八) 痔漏藥

銅杓の内へ製牛黄の末一分を入れ炒りて少し煙の出づるとき、
 砒石の末二匁を入れ煙の起るを俟つて再び白礬の末九匁を入
 れ、滾し乾くを待ちて取り起し、仍火に入れて微しく炒り煨し、地
 上に放、火毒を出し、末となし、而後乳香、沒藥、冰片各一匁を入れ、共
 に極末となし、毎用一匁許、稠糊にて調へ、條子にて漏孔の大小淺
 深長短を量りて之を用ふ。如瘡孔爛大なるは、津唾にて調へ、孔
 内へ入る。痔已に潰動するを待ちて、毒水自ら流れ出づ。若し
 好肉に瘡を生せば、五黄膏にて外を護し、若し錠を入れるゝときは、
 仍津唾を用ひて、前藥の末を調へ、痔根の上に傳く。若し痔根脱

落せば、生肌散を掺けて、蠟礬丸を多服せしむ。

[註] 條子は紙燃

錠は辰砂錠子ならん、第十一項參照。

蠟礬丸は、黄臘二十匁、明礬末四十匁。先づ蠟を溶し、温なるを待ちて礬末を入れ、和し匂
 へ衆手にて急に丸ずること、梧子大、毎三十丸を食前に酒にて下すもの、酒を飲まざるも
 のは熱水にて下す。

五黄膏、未だ考へ得ず（一切の頑癬を治すものに五黄散あり、類似のものか、大黃、硫黄、

雄黄、薑黄、藤黄各等分細末、菜油にて調ふるものなり）

(九) 生肌散

龍骨（煨） 海蝶蛸 赤石脂（各一匁） 乳香 沒藥

血竭、輕粉、雄黃（各五分） 未出毛小鼠（二枚炙乾）
右極細末とし、用ふる時に氷片少許を加ふ。

[註] 氷片は龍腦 未出毛小鼠は鼠の赤子

(一) 又方、生肌散

寒水石（煨、一匁） 龍骨（煨、一分） 乾嚙脂（三分）

輕粉

右細末となして搽かぐべし。新瘡には薄荷一分を加ふ。

(二) 辰砂錠子

久痔漏となるものを治す。

信石（一匁） 白礬（二匁） 蜜陀僧（五分） 辰砂（五分）

先づ信石を研りて細末にし、磁盆中に入れ、火にかけ、次に白礬を
入れて煙の盡くるを度とす。再び蜜陀僧辰砂を研末にし、白礬
一些を和して尖錠子とし、頑漏の瘡口に納るれば、敗肉を去りて
肌肉を生ず。

(三) 盤腸通腸痔散

痔内に在るに、此藥を用ひて痔の頭頂に敷くときは、頭頂自ら出
づ。前藥を用ひて拈らすべし。

磁石（一匁） 枯礬（五分） 白乾姜（五分） 草烏頭尖（三枚）

右末となし、葱汁にて調へ敷べし。

(三) 痔腫者

穀木蠶、五倍子（各等分）末となし、蜜に調へ敷べし。腫消す。

(四) 諸痔を治す

蜈蚣（五枚搗碎）、水銀（一匁）、麝香（三厘）、冰片（五厘）

銀の簪を以て汁を蘸して患上に滴す。

(五) 痔漏を治す

團魚（一枚）頭を扯出して之を殺し、血を取り、團魚頭を焼き灰になし、血に和して丸ず。大さ棗核の如くにして、痔の大小を計りて内へ入るべし。

(六) 漏孔合はざるを治す

石楠葉煎湯を用ひて桶内に放ちて薰洗し、湯の手に通るを待ち

て後漏を洗ひ浄め、後黄牛面前牙齒（四枚）、装ひて小瓶内に入れ、木屑を以て之を燃し、白煙出づる時を待ちて度とす。取出して研末にし、津液にて其末を蘸して漏孔に入るれば、黄水を出すを效とす。黄牛牙齒散は、豫め製し備へて用ふべし。

[註] 黄牛面前牙齒は、アメウシの向ふ齒なり

(七) 益氣清膿湯

調治する方なり。

- 人參、當歸、條芩（涼大腸）、黃連、生地黃、赤芍藥、
- 槐角、川芎、升麻、枳殼（寬大腸）、秦艽、白朮、茯苓、
- 甘草

右水二鍾、生姜一片、燈心二十根煎服す。

[註] 二鍾は二杯なり。

(六) 秦朮蒼朮湯

調治するの方なり。

秦朮(一匁三分) 當歸(一匁) 澤瀉、防風(各三分)

蒼朮(五分) 桃仁(一匁、研為泥) 檳榔末(五分)

大黃(一匁、雖大便燥亦不宜多) 皂莢(燒存性去皮一匁)

黃柏(五分、若大腸頭沉重するものは、濕勝つなり、更に加ふべし。天氣大熱、或は燥熱して冷を喜む者は、意を以て加之)

右桃仁、檳榔、皂莢の三味の末を除き、餘藥を一服となし水煎し、渣

を去り、三味の末を加へ調へ、勻しくして再び火上に上せ煎ずること一二沸、空心に服せしむ。再び美膳を食して之を壓へ、胃の氣を犯さず、生冷硬物、桃李梅杏の類、油麩大料、生姜胡椒の類を忌むべし。第二服には、木香の末三分を加へて前の如くす。

[註] 美膳は俗稱ウマイモノ

(九) 秦朮防風湯

痔漏毎日大便の時、疼痛を發するを治す。如疼痛せざるものは痔漏に非ず。

秦朮、當歸身、防風、白朮(各一匁半) 黃柏(五分)

陳皮、大黃(煨各三分) 粉甘草、澤瀉(各六分)

紅花(一匁) 桃仁(三十枚)

右一服となし、水煎空心に服す。

(三) 秦朮羌活湯

痔漏塊をなして下垂し、疔瘡痒に堪へず、鷄心、垂珠、粟子、雙頭、子母、夫妻、櫻桃、下垂等の痔を治す。

秦朮、黃耆(各一匁)、升麻、柴胡、甘草、麻黃(各五分)、

羌活(一匁二分)、細辛、黃本(各三分)、防風(七分)

(二) 秦朮當歸湯

痔漏大便結燥疼痛するを治す。

秦朮、枳殼、當歸(各一匁) 桃仁(二十枚、去皮研)

紅花(三分)、大黃(四匁、煨)、澤瀉、白朮、皂角仁(各五分)

右水煎服す。

(三) 當歸郁李仁湯

痔漏大便硬く、努力して大腸下垂し、下血苦痛止まざるを治す。

皂莢子(別に末にし)、郁李仁、麻子仁(各一分) 秦朮

(一匁五分)、蒼朮、當歸、生地黃(各五分)、枳實(七分)

澤瀉、大黃(煨、各三分)

右水二鍾煎じて皂莢子の末を加ふ。風寒の處を避くべし。

(三) 紅花桃仁湯

痔漏、勾腸、蓮花、菱角、繸花、珊瑚、盤腸等の痔久しく癒えず。治方、當

に北方を補つて中央を瀉すべし。

生地黄、當歸、紅花、防風、猪苓(各五分)、蒼朮(六分)、澤瀉(八分)、麻黄(二分)、黄柏(一分五分)、木香(二分) 右水煎して服す。

[註] 北方を補つて中央を瀉すは五行を五臓に配すれば北方は腎中央は脾。故に飽食して筋脈横解し、腸辟(下痢)して成れる如き痔に對しては當に腎を補ひて脾胃を瀉すべしとの意ならん。

(二) 槐角子湯

外痔漏根蒂落下して後、此藥を服して、腹内の毒を除くべし。
槐角子、枳殼、黄耆、黄連(各五分)、薄荷(二分)

右咬咀二服となし、水二鐘煎じて八分に至つて空心に服す。

(三) 木香散

用藥の後、小便不通、此藥を服して、外痔には貼藥を用ひず。

山梔子、木通、車前子(各三分)、淡竹葉、生地黄、黄芩(五分)、燈心(三十根)

右咬咀每服四分、水一鐘半に煎じて七分空心に服す。

(四) 又方

痔に貼藥の後、恐らくは毒未だ盡きず、槐米十匁炒りて黄色にし、水一鐘を用ひ、煎じて七分に至り、酒半鐘を加へて温服すれば、痔永く發せず。

〔註〕 槐米は、槐花なり。

(二) 蒼朮澤瀉丸

飲酒熱物を食ひ、脾大熱して、便膿血あり、疼痛するものを治す。

蒼朮(四十匁、去皮)、地榆、皂莢子(各十匁、燒存性)

澤瀉、枳實、秦艽(各二十匁)

右末にし、飯にて丸し、毎服五十丸、温酒米飲にて用ふ。一方蒼朮を去り、白朮を加ふ。

(三) 秦艽白朮丸

痔漏膿血ありて、大便結燥、腫硬疼痛するを治す。

歸尾、枳實、澤瀉、白朮(各五匁)、秦艽、桃仁(爲泥)

皂角仁(燒存性、各十匁)、地榆(三十匁)

右末にし、桃仁泥に和して、煉蜜にて丸となし、毎百丸、鹽湯にて用ふ。

(元) 槐角丸

槐角梗を去り、末とし、烏牛膽内に入れ、風の透る所に掛け置き、末となし、煉蜜にて丸じ、毎服四十丸、平胃散を湯となして送り下す。

〔註〕 梗を去りは、莖を去りなり。

烏牛膽は、黒牛の膽。

平胃散は、蒼朮原朴(各五分)、陳皮(三匁)、甘草(一匁)、生姜、大棗を入れて煎服するものとす。

(三) 腸風痔漏下血臟毒を治する方

大黃(煨)、桃仁(各三分)、當歸、檳榔、皂角仁、黃柏、
荊芥、枳殼(各五匁)、蝟皮(炙)、黃連、秦艽、槐角
(各十匁)

右末となし、麩糊にて丸じ、毎五十丸、食前に白湯にて下す、鮮血下
るものには、棕毛、蓮蓬灰を加ふべし。

[註] 棕毛は棕櫚の毛……灰は黒燒

(三) 大腸内結燥疼痛するを治する方

△黃蠟丸 黃蠟四十匁、丸じること梧子の大きにし、月の朔日に
一丸を服し、次の日二丸を服し、三日三丸を服し、漸に加へて月

盡に三十丸を服し、已りて、次の月朔日に一丸を減じて、月盡に
一丸に至つて止る。酒にて送下す。其瘡癒ゆれば必ず服せ
ず。

△潤腸丸 當歸(五匁)、枳殼(五匁)、百草霜(十五匁)、
大黃(五匁、紙に包煨)

右細末にし、糊にて丸じること梧子の大き、毎服三十丸、白湯に
て下す。

(三) 已に破れ未だ破れざる痔漏を治する方

當歸(酒浸二宿、晒乾火焙)、槐角子(麩皮炒)、蝟皮(炒黃)、
地骨皮(淨晒乾)

右各等分末となし、毎服三匁五分、空心に温米湯にて調へ、五更に之を服して後、略々睡ること一二刻、少し米粥を進む。但し乾餅一塊に宜し。言語を少なくし、心を怡ばしめ、性に適して方に愈ゆ。

一方 青荷葉、焼灰にして末となし、空心に酒にて三匁を下す。
又方 金銀藤並に花、末となし、毎日酒にて三匁を下す。

[註] 金銀藤は忍冬なり。

(三) 痔を療する神方

椽子粉、糯米粉

各二升末となし、炒りて黄にして、毎用二合、滾湯にて調へ餅とな

し、飯上にて蒸し熟して、空心に之を食す。

(三) 氣を壯にし腸を收むる方

翻花内痔、痔頭落ちて腸收まらず、此藥を服して、外痔には貼藥を用ひず。

黄耆、白芷、防風、原朴、當歸(各二十匁)、川芎(十匁)

蔓荊子(十匁)、桔梗(十匁)、木香(十匁)、人參(三匁)

肉桂(五匁)

右細末となし、毎服三匁、空心に棗子湯にて調へ下す。一日に三服。其腸を壯にして自ら收まる。

(三) 猪肚膏

雄猪肚（肚は胃なり）一枚、垢を去り、浄めて皂角刺十匁を入れ、
兩頭を縛定して煮爛らし、薬を去つて、空心に意に任せ喫せしむ。
又塩醬を用ふべからず。三肚を服して後、即ち根を除く。

(三) 海螺螄

一人痔を患ふ、毎日海螺螄半升を食ふ。鹹に因つて苦茶にて口
漱す、約するに二斗に及べり。又能く清心寡慾にす。痔即ち消
す。痔は即ち臟火陽に属す。海螄は即ち性寒、味鹹、陰に属す。
寒は能く火に敵し、鹹は能く堅を軟にす。茶は又苦涼^{の味}、要するに
又殆ど理あり。

(三) 甘草膏

小兒痔を生ずるには、空心に甘草膏を服して自ら愈ゆ。

(三) 孫真人麝香膏

麝香（二分）、乳香（三分）、血竭（四分）

右一所になし、小紅棗を煮、皮核を去り、肉にて薬を和して餅とし、
痔の大小に依つて痔の上に放ち、膏薬を用ひて之を貼す。痔内
より血水、黄膠水流れ出づ、これ痔毒なり。一二次にして即ち愈
ゆ。

(三) 丹溪先生漏瘡治方

丹溪先生漏瘡を治するに、先づ補薬を用ひて氣血を生じ、参考歸
朮を主とす。大劑之を服す。即ち王道平々の劑なり、外には附

子の末を以て、津液にて餅となし、錢の厚さの如くし、漏所に放ち、艾火にて之に灸して微熱せしむ、痛ましむべからず、餅乾けば再び之を易ふべし。其餅症に随つて大小をなす。如困倦せば止むべし。明日灸して肉平なるを度とす。仍前の補薬を服して、生肌長肉の薬を搽すべし。

(四) 薰痔方

大雄雞を宰して血を去り、湯にて煮て毛を擇き去り、鷄を取出し、擇毛垢湯を取りて一二沸し、其湯を桶の内へ入れ、蓋定して其湯氣の泄れざるやうにし、少頃して後蓋を取り、桶の上に緊坐して薰じ、湯の少しぬるくなりたる時、其湯にて痔を洗ひ、拭ひて乾か

し、蜈蚣一條碾り末にし、艾二匁と和し捻ね條となして桶内に放し、坐して薰ずべし。其の痔焦熟する尤も妙なり。新生のものは一兩次愈ゆることを得たり。久生のものは五次にして愈ゆ。後随つて益氣清臟湯、秦芫蒼朮湯の類にて調治せよ。

[註] 宰しては、料理しての意

蓋定しては蓋をよくすること

益氣清臟湯、秦芫蒼朮湯に就ては第十七、第十八項参照

(四) 洗痔方

馬蘭頭(一斤)、皮硝(四十匁)、煎じ滾し、坐して薰じ、湯の温きを候ひて痔を洗ふ。

又方 牛膝搗爛し煎湯にて洗ふ。

又方 紅花子打碎き煎湯にて之を洗ふ。

又方 魚腥草煎湯之を洗ふ。

又方 白菴菘煎湯之を洗ふ。

[註] 馬蘭頭は、コン菊の芽

魚腥草は蕺菜

白菴菘は唐菜(タウナ)

(四) 洗痔國老湯

荊芥(十匁) 甘草(十匁) 藿香(五匁)

右多少に拘らず煎湯にて洗ふこと一次、藥を用ふること一次、外

痔に用ひず。

又方 皮硝、鳳尾草、五倍子、韭菜子(等分)、水一桶煎數沸、桶上に坐して熏洗すべし。

(三) 脱肛痔

肺と大腸と表裏たり、故に肺臟蘊熱すれば、肛門閉結す、肺臟虛寒すれば、肛門脱出す、至當の論なり。又婦人産育力を用ふること過多なるときは、血枯れ氣虚し下陷す。及び小兒久痢皆よく肛門を突出せしむ。是を治するは唯肺臟を温補し、腸胃を滋榮すること久しきときは、能く自ら收まる。血虚の脱肛には四物湯を主とす。氣虚の脱肛には參耆歸朮を主とす。血熱には凉血を主とす。四物湯に 黄柏を加ふ。

(四) 摻藥

乳香(五分)、沒藥(三分)、血竭(一分)、紅絨灰(五分)、
牛黃(五分)、冰片(二分)、珍珠(三分)、孩兒茶(二分)、
象皮灰(三分)、芍藥(三分)、五倍子(二分)

右極細末となし、藥湯にて洗ひ淨め、乾かして後摻くべし。風を
避くべし。

[註] 紅絨灰は、紅布灰なり。

(五) 大人小兒摻藥

赤石脂、伏龍肝(各十匁)

右末となし、腸頭に傳けること日に三次。

(四六) 升元太補湯

人參(三匁)、升麻(五匁)、白朮(二匁、土炒)、白芍藥(一
匁、酒炒)、生地黃(一匁、姜汁煮)、當歸頭(二匁)、黃耆
(三匁)、黃柏、知母(各一匁、俱塩酒製)、粉甘草(五分、炙)
山藥(一匁)、防風(一匁)、肉桂(五分)、附子(七分)、紅
花(六分)

右一服となし、水二鐘、姜五片、棗肉二枚煎服。川芎を用ひざるは、
氣を泄すに依りて止之。虛甚だしきものは、參耆歸麻を倍
加す。

(四七) 虚人の脱肛——灸法

虚人の脱肛は、補中益氣湯に、黃柏、知母、蒼朮、黃芩を加ふ——肛門
痒きには、秦艽、桃仁を加ふ——大便閉塞には、皂角仁を加ふ。

冬至前は、天道嚴寒にして、其氣極沈極降の時なり。況んや人身
は小天地なり。天は上に在つて人は中に居り、地は下に在り、豈
相應せざらんや。之を治するに效を奏すること能はず、陽生ず
る後、日長きこと一線、陽漸く長じ、陰漸く消ず、灸法を以て之を治
すべし、效無きものはあらず、病人氣を戒め、勞を少なくするを上
策とす、晴明和暖吉日を擇び、風の通はざる煖室の中に坐して、頂
上旋毛百會の穴を取りて灸すること三炷、随つて升元太補湯を
服すれば、其肛門漸に收まる。蓋し百會は一身の樞紐なり、大に

能く下陷の氣を升提す、故に能く效を奏す。若し冬至前は灸す
べからず、益無し。次の日再び尾翠骨に灸し、又臍中に灸す、年壯
に隨ふ。此法屢々用ひて甚だ效あり、諸痔漏も亦治す。

(四) 洗法

生鐵五斤、水二斗を用ひて、煎じて五升に至り、鐵を出して之を洗
ふ。一日に三次。明日再び新鐵を易ふること前の如くして之
を洗ふ。

又方 枳殼、朴硝、川芎、當歸、桑枝、艾葉（各十匁）、地榆、蒼朮、
右洗湯之を洗ふ。

但し肛門收まりて、補藥を服し、調攝すべし、其餘は漸々乾息す。

結痂の時偶々喜樂のことに遇ふときは、忽然として脱落す。

痔漏口訣 終

享和元年辛酉夏四月

堀川通高辻上町

皇都書林

植村藤右衛門

昭和十二年十二月五日印刷
昭和十二年十二月十一日發行

痔漏口訣

定價金九拾錢

校註並
發行者

東京市澁谷區羽澤町五十三番地

石原保秀

印刷者
印刷所

東京市牛込區富久町七十七番地

昭文堂 宮本守太郎

東京市澁谷區羽澤町五十三番地

發行所

和漢醫學社

(電話青山二三八三番)
振替東京三一三六九番)

304
90

終